

フィリピン情報No.11

貧しくとも心は豊かなこの国の人たちその根源を探る

Posted: July 17, 2010

English: http://www.a-bombsurvivor.com/contents/Philippines_information/philippinesinformationNo.11.eng.pdf

フィリピンのことに関する情報の提供は、毎週月曜日の日英語による「週刊メッセージ」をはじめ、「独り言」、「特ダネ情報」それに、「フィリピン発メルマガ(定期発信日:毎月6日、臨時号)」でも断片的ですが事実上書いてきています。本欄では格別にフィリピンならではの情報に限って字数に制限なく書くことにしていますが、長い間心ならずも本欄での書き込みがお留守になりました。今年1月18日以来のことで、7カ月ぶりになります。

フィリピンに移住して17か月になりますが、この国に来て以来、ず〜っと関心を抱き続け、かつその原因を追究し続けていることに、この国の人たちのなんと底抜けに明るい表情であることか、ということです。ご存じのように、この国の貧困率は日本の14.5%に対して30%という高い比率です。

現代日本人が貧困さや将来に対する絶望感からかは別にして、自殺率は先進諸国でナンバーワンというのが嘆かわしい実情ですが、此処フィリピンの人たちは貧しくとも心は豊かに生きているのです！その最たる証拠の一つはその自殺率が104カ国中で84位と極めて低いことです。

そのようなことから、フィリピンのそうした国民性などを私なりに分析したい心境に至り、街の中をドライブする時も、モールで買い物する時も、往来する人たちを意識的にウォッチしています。憂鬱そうな表情をしている人がいるかどうかと、ちょっと意地悪いウォッチのしかたですが、ホントの本当にそんな観察をしても見当たらないのです。今後もそうした私の観察姿勢は変わらないでしょう。

劇作家の故井上ひさしさんは馴染みの喫茶店の奥の席に長時間陣取って、道路を往来する人たちをウォッチングしておられたそうです。私の場合も全く同じでして、モールなどで買い物したり食事する時でも、長時間じ〜っと人間ウォッチングしてまったく飽きないのです。この国の人たちの「幸せ感って、何処にあるんだろう？」という私の疑問に対する飽くなき追求です。

そんなことから、私が接するフィリピンの人たちには事あるごとに遠慮なく質問します。現在のアパートに引っ越した際も、出入りする電気や大工の職人さんたちをつかまえては遠慮なく尋ねました。「月収は幾ら？あなたたちは貧しくても明るい表情を浮かべ幸せそうですね。何故なのですか？」と。最近に至っては、私のアパート周辺に往来する本学大学生たちが(も)対象です。先日5人のフレッシュマン(一年生)が押し掛けて来たのを機に、同じ質問をしたものです。

かれらとの懇談や取材でどんな言葉が返ってきたかを述べる前に、若干、フィリピンという国の成り立ちを述べます。フィリピンはスペイン植民地時代(1565年~1898年の333年間)から、アメリカ植民地時代(1898年~1946年の48年間)の計381年間を植民地に甘んじてきた国です。世界史や歴史年表上では、フィリピンが誰の束縛もなく本当の意味で独立を宣言したのは、戦後の1956年7月4日となっていますが、同国民にとっての真の独立記念日は1898年6月12日となっています。時の初代大統領エミリオ・アキナルドが自宅のバルコニーから独立宣言をしました。

以下は、そうした歴史的な背景を持ったがゆえの現代のフィリピンとその国の人たちの国民性である、というのが私の分析です。そのことが後に自他ともに正しいと信ずるに至ります。

概して言えることは、333年間でフィリピンがスペインから継承し、現在にして厳然と生き続けているもの、それはローマ・カトリック教です。総人口の82.9%がローマカトリック教徒です。ちな

みに、5.4%はプロテスタント、4.6%イスラム、4.9%二つのフィリピン独立教会、2.2%その他です。

一方、半世紀近いアメリカ植民地から継承したものは教育を中心とした政治、軍隊、警察等社会構造の仕組み全体です。いわゆるアメリカンデモクラシーそのものです。議会の模様や選挙の在り方はその典型。軍隊や警察の教育、特にミリタリー・アカデミーに至っては、その軍隊の服装ややり方はアメリカのそれと瓜二つで、その凜々しさは実にカッコいいと感じます。大統領就任後の「最初の100日間は静かに見守る」というしきたりまでアメリカのそれと同じです。アメリカから採り入れたものです。

アメリカから継承した教育文化では、英語を第二国語としたことがその最たるものです。後出するフィリピン人の「海外出稼ぎ」に対する巨大なエネルギーの根源の一つにもなっているかれらの英語力になっています。ごく最近の情報によると、スペイン語の大学教育も考えられています。

ちなみに、大衆の集まる大きな規模の遊びの場における行事一つでも、その開会に当たっては、全員が起立して国旗掲揚に敬意を表し、国歌を斉唱する姿は米国仕込みそのもので、国旗国歌をも否定する教師がいる日本の国民として、我が国の現状に対して恥ずかしさを禁じ得ません。

余談ですが、アメリカ植民地時代に米国が試みたフィリピンにおけるプロテスタントの普及がありましたが、フィリピン人はこれを拒み、ローマカトリックに固執したそうです。何せ、それは333年間の歴史を持ち、フィリピンの先祖伝来のDNAにまで深く根付いていたからです。ちなみに、私がよく引き合いにする「誤解されているフィリピン」の著者・花彩美路さん(本名・笠井正史)は、このことを評してフィリピンの人たちは日本人のように、何もかもアメリカに追従はしなかった、と書いておられます。その分、歴史上培われたかれらの国民性と主体性を確立していたということと私は解釈しています。

さて、フィリピンの人たちの宗教観を考える際に強く感じるがあります。それはこの国の至るところに築数百年という教会堂が沢山あることです。木造と違って石造りですから、何百年の風雪(おっと、雪はありませんので、歳月)に耐えます。現代の夫婦子供家族が出入りする教会堂ですが、かれらの祖々父母のそのまた祖々父母と何代にもわたって通い慣れた教会堂です。おとなしくしている幼児を伴う夫婦の礼拝堂での仕草をみるにつけ想うのです。何代にもわたって通いなれ、生活文化にとけ込んだ信仰生活です。付け焼刃的なものでは断じてありません。かれらのDNAに刻み込まれたそれは生活文化であり宗教観です。

フィリピン人の国民性の一端を垣間見ます。例えばの話、目上の人に対する年下の者が示す「敬意の仕草」があります。つかつかと歩みより、年配者の手をとってその手の甲を自分の額に当てがって、“Bless”(お恵みを)と口にする仕草がそれです。年配者に対するそれは敬意の表示です。スペイン植民地時代にかれらが採り入れた年長者に対する敬意の仕草。なんとも美しい光景でそれはあるでしょう！

子供が親を殺すのが珍しくない現代の日本ですが、目上の人に対して敬語を使う日本人古来の良さが敬語どころか、殺傷するという嘆かわしいDNA変化をきたしていることは慙愧に堪えません。日本人でありながら、日本批判するとは、とお叱りを受けることも承知の上ですが、海外からみた祖国日本の欠点が気になる昨今です。

いまひとつ、日本人と比べて大きく異なる光景とみるものに、かれらは他人に対して羨望の表情を見せませんし、逆にどんなにみすぼらしそうな人を見ても蔑む態度もみせません。たとえばの話、日本では良く観られる光景ですが、路上に居並ぶバス待ちの人たちの前をベンツみたいな高級車が通りかかります。日本人は老若男女を問わず、一斉にその羨ましいと思われるガイシ

ヤに目を向けます。羨望や場合によっては嫉妬に似た心理からくる行為です。くだんのガイシャに乗っている人は優越感ってところですよ。

ところが、此処フィリピンでは全くといっていいほど、そんな光景を觀ません。それを他人のことに無関心、とかたずけるのも大人気ないですが、周辺の人たちにこのことを語ってかれらの心理を取材するのですが、これまた異口同音に帰ってくる言葉は、「人はひと。自分はじぶん。あんなになりたかったら努力すればいいだけさ・・・」といったアツケらかんの態度であるにすぎないのです。これには、参った！と言いたい心境です。かれらの貧困は心まで貧困化してはいない、と学びとるのです。

日本人はリッチなくせに、他人を羨むという心理が濃厚です。裏を返せば島国特有の優越感と劣等感の狭間で垣間見れる日本人の心理です。日本語の構造にも明らかにそれを意識した単語や表現があることは読者は充分ご存じのとおりです。勝者とか敗者とかいったとんでもない言葉が横行するのはそうした心理でもあるでしょう。

島国といえば、7千以上もある群島で成り立つフィリピンも日本以上の島国ですが、島国根性は感じません。逆に大陸的な西欧化現象が著しい感じですよ。商店街SMでショッピングする際にも強く感じる場合があります。多くの客は明らかにウインドウショッピングです。買い物したポリ袋を手にしなのが圧倒的な大多数でありながら、ショーウインドウに飾られた豪華な商品を羨望の眼差しで観る光景もないのです。

特にスタイルの良いボディーで颯爽とモール内を歩く女性の姿は日本ではみられません。ヘンな話ですが、日本にいた頃にはそんな観方をしたことがなかったもので、ケーブルテレビで観るNHKに日本人の歩く姿を観察して比較しているのです。私の分析に間違いはない、と感じるのです。こんなことを日本人の女性が読まれたら嫌われるがオチって承知のうえの観方ですよ。

余談ですが、日本でよく見かけられる若者の姿に、公共の場や道路でも見かけられる地べたに座り込んだらしない光景がありますが、この国では全くみられません。周辺の人たちにそのことを話して、フィリピンの人たちのマナーの良さを口にするのですが、そんな折に返ってくる言葉は共通です。「そんなことをしたら、すぐさまガードマンやポリスマンが来て注意するからそんなことはあり得ません」と。

蛇足の弁で恐縮ですが、離日する折に、ある人が私にそ〜とくれたものがあります。腰につけるポシェットというヤツで、中に入れてくれたのが、「警笛」でした。「まさかの時にはこれを鳴らして救いを求めなさいよ」というのです。身近な人に打ち明けたら、あっ気にとられたような表情で「冗談じゃあない！ そんなものなんて、要りませんよ！」と。事実、市民生活上の治安状態は日本よりもはるかに安全であることを身を持って体験しています。通り魔事件なんて、聞いたことがありません。

さて、前置きが長くなりましたが、肝心の問題点である、「なぜ、フィリピンのひとたちはたとえ貧しくても、明るい表情で陽気で楽しそうなのか？」ということです。実際にかれらに尋ねて確認した十中八九の回答には少なくとも3つの明確な共通理由を発見します。

第1は、カトリック教徒としての宗教観からくる感謝の心。第2は、家族愛。第3は、亜熱帯地方に住む人特有のおおらかさというか、屈託のない「国民性」のようです。一つひとつ私なりの分析をしてみます。

第一の宗教観が招来すると考えられる「心の幸せ感」について、述べてみます。

ボクシングの世界チャンピオンで今回の総選挙で議員に当選した、かの Manny Pacquiano がリング上で胸に十字を切りました。サッカーW杯でも多くの国の選手たちが同じ行為をするのを殊の外興味と関心を抱いてみました。フェアプレーの世界でも宗教観を貫いているのです。

フィリピンの人たちの生活の中に深く根付いている信仰心はタダものではありません。神に対する敬畏の念は感謝の心に通じます。生かされていることへのそれは理屈抜きの素朴な感謝の心に転じます。どんなに貧しくとも、食するものが何とか得られれば感謝だ、に通じると思うのです。考えてみると、現代の日本人にこの宗教観が失せ、感謝の心が失われてきていることを痛感します。勝者・敗者というんでもない言葉が当該者本人自他ともにまかり通る世の中になってしまっています。優越感と劣等感がその裏返し。感謝の心は見当たりません。

第2の「家族愛」には脱帽あるのみ、といった感じです。

家族愛って日本でも同じさ、という反論もあるかと思いますが、私が少年時代の日本はそうでした。戦後の貧しさゆえに強まったのが家族愛のような気がしてなりません。アメリカ式に「核家族化」が日本古来の家族制度を崩壊しました。じじつ、不自由でも共同生活をしていれば色んな問題は出るでしょうが、援け合いの心は必然と生じます。というよりもそうせざるを得ないのが2世代雑居生活であったかもしれません。

子供たちが結婚して親元を離れ独立したまでは良いとして、一旦核家族化したらそれぞれが自立生活を強いられることから相手のことを思いやる余裕も失せるでしょう。得るものがあれば失うものもあるということです。

この家族愛がフィリピンの人たちをして、貧しくとも心は貧しくない、と言わしめるのです。戦後の日本人のそれと比較したら、共通点を見出しそうです。しかし、事実は一線を画す相違点が顕著です。つまり、その家族愛も第一の宗教観に根差したものであるからです。具体的には、築数百年の教会堂に親子家族全員が連れ添って礼拝に出掛けることに始まると考えます。幼児に至るまで礼拝マナーは身につけている感じです。心体一致とも言える家族愛です。

日本では、公の場の集会などで幼児の奇声が聞こえるのは珍しくありません。さりとして、親がそれをたしなめることもしないのが珍しくありません。不思議とこの国ではあまりみられない光景です。毎週礼拝に親子連れで行くことからか、訓練されている感じです。「シー」と制する親の声(言葉)がこの国では珍しくありません。それを素直に受け入れる光景も珍しくありません。西欧的なそれは社会人のマナーと見受けれます。

フィリピンの人たちが異口同音に幸せ感の根源とするのが家族愛ですが、両親子供を含む平均家族数が7、8人が雑魚寝状態で生活しているのです。食べるものもシェア(分かち合う)することが日常茶飯事です。子たちが結婚して別所帯を持って、こうした援け合い、分かち合いの心は続きます。もっとも、裕福な両親は先進諸国並みに少数の子供を持つ傾向は年々増加していますから、果たして今までと同様な家族愛が継承されることには一抹の疑問は残るかもしれませんが、日本との大きな差異は宗教観と信仰生活の有無の違いが招来するものと思います。

第3の亜熱帯地方の人たちの屈託ない国民性について考えてみます。

これは彼らの口から直接出てくる言葉では決してありません。かれらの語り口から私が想像することです。つまり、かれらが言うには、「人生は一度。楽しく過ごしてこそ・・・」といった素朴な人生観というよりもホンネの呟きのようでもあります。

以下は、私がかれらに語りかけて逆にそう思わない？と問いかけるのです。かれらにそうした自覚を求めることに日本人としての私の存在があることを自他ともとする所以です。

私の洞察は、そうした達観したかのようなかれらの人生観も、元はと言えば、贅沢な食生活でなくとも、食べていくことには何とか不自由しないということがその背景にあると考えます。

食料といえば、私の弁ですが、「みなさんは、まさかの時にはバナナをもぎ取って食することで一食や二食は過ごせるでしょう。でも日本ではできません。フィリピンでは年中ショートパンツと半袖シャツで、しかも、野外でも寝れますが、日本ではできません。冬になれば部厚い衣服が求められ、野外では凍死します。その点、常夏のフィリピンは過ごしやすい楽天地。

こんな話を持ち出すと、かれらは反論する余地を見出しません。ヘンな話ですが、外国人の私からそんなことを言われてはじめて、そうだなあ・・・と感じるようです。裏返せば、なんてこの国は生活しやすい国だろう、ありがたい！といった気持ちを招来するとも言えるでしょう。日本人としてかれらに喜ばれるエールにもなると思っています。

フィリピンは東南アジア諸国のひとつですが、周辺諸国の人たちと比べて、ひととき異なる雰囲気を持っています。かの「誤解されているフィリピン～フィリピンとフィリピンの人たちに対する誤解を解くために～」の著者・花彩美路さん(本名・笠井正史)の弁によると、「貧困さに関してはフィリピンは他の東南アジア諸国のそれとまったく異なる雰囲気がある」と。同じ貧困さでも餓死するような悲惨な状況は此処フィリピンではまずあり得ない、と私は判断します。従って人々の精神状態も逼迫した悲惨さといったものからはほど遠い陽気な雰囲気がある、ということ私は判断しています。

おかしなもので、フィリピンのひとたちは先祖伝来のそうした生活の在り方を身を持って体験してきているのですが、案外と自意識としては強く持っていない感じがしないでもありません。私が以上のような点を指摘して、「そう思いませんか？」と逆に問いただしてはじめてかれらは気付く人もいます。日本語で言えば、「そういえばそうだよね・・・」といった反応です。

第三者から言われて初めて気付くことって、珍しくありません。先般もこんな体験をしました。マネージャーの身分の銀行員女性と話した折のことです。彼女が私のフィリピン永住計画を知って質問したことに端を発しました。なんでそんな気持ちになったのですか？といった彼女の反応でした。住めば住むほど、知れば知るほどにこの国と人たちが好きになったから、と答えました。

その時に言及したことがフィリピンとその人たちの文化の高さでした。私のかねてよりの弁は、フィリピンは381年間に及ぶスペインとアメリカの植民地下にあった。ために、先祖代々にわたって、両国の西欧文化を取り入れてきた。カトリック教や英語の第二国語化はその文化の最たるもの。そういった面では、100数十年前によく開国して西欧文明を取り入れた日本とは比較にならない深みのあるのがフィリピンの人たちの生活文化だ、と。

同女史、う～んと頷きながら曰く、「今までにそんなことを考えたことがありませんでした。言われてみればまったくそうだと感じます。イイ話しをうかがいました」と喜んでくれました。そうなんです、人間って、案外と自身が分かっていないもの。人から指摘されてはじめて客観的に自分を観る、知ることができる、というものだというのをここでも証明した想いです。

フィリピンの人たちへのエールの一つとして必ず語ることは、男女を問わずのことで、かれらは海外での活動には日本人の真似のできない分野と広さで旺盛だということです。「みなさんの同胞が何人くらい海外で働き生活しているか知っていますか？」と問いかけます。明確に答えたケースは皆無ですが、なんと、1千万人です。かれらが祖国へ持ち帰るおカネはフィリピンのGDPの何と10パーセントです。対する日本人は十分の一の100万人です。ごく最近の情報によれば、大企業入社の日本人新社員の8割は海外勤務を好まないとかです。

なお、フィリピン人の海外進出の理由はフィリピンでは働く場が無いからではありませんが、それを可能としているのは何と言ってもかれらの「英語力」と「勤勉さ」だと力説するのが私です。日本人が敬遠する「介護士」などの職業に喜んで従事するフィリピーナと彼女たちの英語力と勤勉さは、日本人とは比較にならない自慢すべきもの、と力説しているのです。かれらの耳に快く響かない理由はないでしょう。別にかれらに胡麻スリするわけでもなんでもありませんが、真実を語ることで、かれらに自尊心と自負心と自信を持って欲しいのです。これらは殺し文句でもあるでしょう。

日本人として発展途上国に住みこみ、市民税も払わずに生活する身です。日本文化を紹介することよりも、かれらの文化を語り、かれらの良い点を指摘することこそが、先進諸国民としての役目と自負します。

最後にひと言言します。フィリピンの将来性です。人口は増加の一途で、遠からず日本に迫り追い越します。一見、貧しい東南アジアの一国のようですが、前述したように、英語は第二国語。世界をまたにかけて働き住んでいる勤勉なフィリピン人は1千万人です。侮りがたいポ・シャリティーを秘めていると考えます。

ある時点で今までの大統領よりひと味変わった世界観とリーダーシップを持つ大統領が出現した時のフィリピンを私は想像しているのです。世界をまたにかけたのは昔は華僑、次世代はフィリピーノと想像します。

仮の話で恐縮ですが、今回の大統領選の候補者の一人に、元運輸長官だったアロヨ政権与党のギルバート・テオドロ(Gilberto Teodoro)という人物がいました。本人はハーヴァード大学卒で奥さんはアメリカ人。アキノ大統領とは従兄弟の関係。かれの選挙演説をテレビで聴いて感じました。こんな人物が大統領になったら、フィリピンは大きく変わるだろうな、ということです。じじつ、私の周辺には同候補のシンパで一杯です。フィリピンがアメリカとホンキで手を結んだら、沖縄問題はひょっとして無用の存在になるのではないかと国際政治はド素人の私ですが、ふとそんな気がしたものです。

「英語と自由」の著者・イギリスのポール・ジョンソンさんのことを2回にわたってフィリピン発メルマガのテーマにした私ですが、その続々編として「特ダネ情報No.73;日本語の矛盾を考える主語はいらない? I&YOUの日本語は多様で美しい?」にも皮肉な見解を述べていますが、ジョンソンさんが言う、英語教育が盛んなインドが遠からず中国を抜くだろうということを、別の意味でフィリピンに置き換えているのが私です。

末尾にもう一つ、私が常日頃からフィリピンの人たちに語っていることを述べてみます。それはフィリピンという国と地形とそのことに対するある種の解釈と自意識の啓蒙です。地図を広げてみてください。フィリピン国の地形は人間が座っている横姿に観えませんか? じじつ、フィリピンの人たちはこのことをよく口にします。まずは、地形の説明から始めます。

人間の頭に当たるのは最北端のルソン島です。後頭部が大きいところは頭脳のイイ人間のようですね。脳の中心に位置するところがバギオというところで、第二次大戦の激戦地でした。多数の彼我の将兵が戦死しました。20世紀初頭に5千人の日本人労働者が道路工事や農園事業などで出稼ぎに来たところです。戦争が始まって一部の日本人は帰国できないままでその子孫が現存しています。

上に向かって大きく出た感じの鼻にあたるのがアラミノスという地名。ず～と下にきて人間の口にあたる部分が首都圏マニラで、その下の顎にあたるところが私の住んでいるラグーナ州です。人間の背中にあたるのがサマルからレイテ島に至る部分で、背中をすこし丸く屈めた恰好です。

前に突き出したような腕はパラワン半島諸島に当たります。
少しばかりお腹の出た格好の場所は、観光地で有名なセブ島やネグロス島。お尻に当たるのが最南端のミンダナオ島。膝を少し曲げて前に伸ばした格好の足はパラワン半島諸島・・・といったところ です。

国全体の形が人間全体の形を呈しているのはフィリピンだけだと思います。イタリアの「長靴」はつとに知られていますが、人間さまの形状をしたのは他に例がないと思います。

そこで、私の論理と解釈が出てくるのですが、こうしたことは偶然ではないような気がする。そのことをフィリピンのひとたちに語り伝えることにしているのです。すなわちそれは、キリスト教という「神は天地の創造主」であるとしたら、フィリピンという国の形状を人間のそれに観たてたのも創造主。とすれば、そこには深い意味があるに違いない、という推理です。

よっとして、創造主はフィリピンという国を人類の理想的な棲家として創造し給うたのではないか、という冗談とも本気ともつかない推理です。また、その露払いとしてこの国の民をローマカトリック教徒として育成してこられた・・・というシナリオです。

長文の本稿の末尾がいささか推理小説的な分析になりますが、私はホンキでこのことを強調して語り続けていくつもりです。「フィリピンの人たちは、創造主から名実、形の上でも何かを託された国民ではないか」ということです。かくいう私自身がそんな夢みたいなことを心に留めてこの国を終生のパラダイスと解釈して生きるとすれば、これに勝る幸せはないとすら考えるのです。思わぬ方向に向かった本稿ですが、本稿のタイトルに相応しい結末結論と解釈すれば、嬉しい限りです。

なお、本稿は肝心のフィリピンの人たちにも読んでいただく価値があると考えますので、英語翻訳版の作成掲載も視野にいれているものです。

(追記その1:2010年11月1日)

本稿を掲載して3カ月過ぎの本日11月1日に掲載した「[フィリピン情報 No.13:2つの事例にみるフィリピン国状の明暗](#)」がありますので、クリックしてみてくださいなれば幸甚です。フィリピンの人たちの明るい表情の根源をあらたに見出しました。

(追記その2:2011年9月23日)

フィリピン人の国民性を表現する言葉に接しましたので、追記します。フィリピン情報 No.33:「[日刊まにら新聞誤記事:比は絶望の国?一若者の自殺傾向を巡るエピソード](#)」に書いているものですが、「フィリピン人は楽しむことを何よりも愛し、陽気で、毎日『バハラナ』と言っては、神にすべてを委ねる楽道家で知られている・・・」と。後日、フィリピン人友人にこの言葉について訊ねてみたところ、「BAHALANA」ということを確認しました。常夏の国の人たちの国民性とも思える言葉です。私が本稿で熱っぽく述べたフィリピン人の明るさの根源を垣間見た想いですので、本稿末尾に追記するものです。

2010年7月17日

吉田祐起

(原爆生存証言執筆者／健康・生きがいづくりアドバイザー)

E-mail: yoshida.yuuki@a-bombsurvivor.com

URL(Jpn): http://www.a-bombsurvivor.com/index_japanese.html

(Copyright 2004-2010 Yuuki Yoshida All Right Reserved)